

競 技 委 員 会

委員長 渡 辺 旭

半世紀の節目である創立50周年を迎えられたことにあたり、これまでの歴史を築いてこられた諸先輩方の御苦勞と御功績に感謝の気持ちと敬意を持ち続け、これからもテニス協会の発展に協力していきたいと思っております。また各団体の皆様のご理解とご協力に感謝するとともにお礼を申し上げます。

競技委員会は、年間主大会である5大会と、それに次ぐいくつかの大会について活動しております。

主大会としては

- ・春季テニス選手権大会兼国体予選大会
- ・会長杯テニス選手権大会
(旧全日本テニス選手権大会。平成27年度から名称変更)
- ・山梨県テニス選手権大会
- ・山梨オープンテニストーナメント大会
- ・冬季テニス選手権大会

があり、それに次ぐ大会としては

- ・全日本テニス選手権大会山梨県予選会
- ・DUNLOP SRIXONテニストーナメント山梨県予選会
- ・教職員テニス選手権大会
- ・関東オープンテニス選手権大会山梨県予選会
- ・山梨県スポーツレクレーション祭
- ・ねんりんピックやまなし
- ・山梨県体育祭

などがあり、これらを主催・主管しています。

各大会ごとの活動は、1.大会要項の作成、ホームページへの添付 2.申し込みの集計 3.試合の組み合わせ 4.タイムテーブルの作成 5.大会冊子の校正 6.試合当日の大会運営 7.試合結果を新聞社へ送付するという投稿依頼等々さまざまな作業を行っております。

主大会である山梨オープンテニストーナメント大会はオープン大会のため、県外から多数の参加者があります。過去の大会においては、全米オープンダブルス優勝の宮城淳選手やデ杯日本代表の本井満選手、広瀬均選手など数々の著名選手も来県してくださったと聞いております。そのような選手と試合ができたのは本県選手の喜びであり、またレベルアップにも繋がり、大会が非常に盛り上がっていたようです。最近でも県外選手の参加で県内の参加者にも喜んでいただき、大会を開催する私たちも嬉しく思っております。また、先日の団体戦では県外からの参加者が連覇をし、「とても良い思い出となった」と喜ばれ、「ぜひ次も参加したい」と言いながら帰って行きました。

しかし残念なことです、最近では各大会の参加者数が減少傾向にあります。競技委員会としては参加者数を増加させるために、敗者によるコンソレーションマッチを行ったり、エントリー数が少ない種目ではトーナメント戦ではなくリーグ戦にしたり、団体戦を各大会ごと開催(各大会ごと種目を変更して実施)しつつ、参加者数の増加を図っております。今後もいろいろな大会や、種目を模索しつつ工夫をし、皆さんに喜んでいただいて、参加者が増える大会をたくさん開催していきたいと思っております。

最後になりますが、今後とも山梨県テニス協会をこれまで以上に活気のあるものにしていきたいと思っておりますので、皆様からの変わらぬご支援とご協力を賜りたく、お願いいたします。

強 化 委 員 会

委員長 小 林 修

山梨県テニス協会の強化委員長に就任し30数年が経過しました。長い間協会に携わったことで数々の思い出があります。当時の協会は理事長以下全員が30歳代以下の若手で構成されており、今もなおその役員がほとんど継続して協会を支えていますので、まとまりのある居心地のよい協会であると感じております。

さて、強化委員会の目的の一つとしているのが国体です。国体での入賞を目指し、山梨県から助成を受け選手強化を図り、その他各種大会においても優秀な成績を収めることができるよう取り組んでいるところであります。

山梨県は選手層が薄く、国体ではレベルの高い関東ブロックを突破することは難関で入賞回数も少ない中、昭和61年の山梨国体においては、成年男子は佐山綱一、堀内昌一、小林秀徳、広瀬均、石井正己選手が優勝、成年女子は池本裕子、石井千恵、小幡信子選手が3位、少年男子は神田佳紀、樋口勇人選手が5位、少年女子は小林真佐美、斉藤裕子選手が3位という結果を残すことができました。さらに平成14年の高知国体において、成年男子の三好勲、永久亮、戸澤克也選手が5位、平成17年の岡山国体において、成年男子の三好勲、永久亮、大内海選手が3位、平成18年の兵庫国体において、成年男子の三好勲、大内海選手が3位、平成22年の千葉国体において、成年女子の大澤愛加、奥田なる美選手が6位、平成23年の山口国体において、少年男子の中込優介、矢崎頼選手が8位になりました。そして、平成26年の長崎国体においては、成年女子の久次米夏海、本郷未生選手が優勝することができました。成年女子につきましては、山梨学院大学女子テニス部関係者のご尽力により、ハード、ソフト両面において優れた環境の中で強化を図ることができ、全日本大学王座で2位、国体においても優秀な成績を収めるようになってきております。

一方、最近の錦織圭選手の活躍もあり、小学生以下のテニス人口が徐々に増加しておりますが、選手層が薄い本県においては、民間クラブや協会市町村支部、学校、保育施設等の協力を得ながら、特にジュニア期の早い段階からテニスに親しむ機会をつくり、高校までの一貫指導により、さらに競技力向上を図っていかねばならないと考えております。

この先、何年協会に携われるかわかりませんが、いい思い出を積み重ねることができればと願っております。

審判委員会

委員長 水上浩之

山梨県テニス協会の50周年記念誌に、私のようなものが投稿できることを光栄に思います。私が審判委員長という立場で、前任の渡邊茂夫氏から引継いだのが平成12年でしたが、その後皆様の協力もあり滞りなく活動ができたのは審判員をはじめその他役員の方々の協力があったことであり、改めてお礼を申し上げます。

昔を思い出してみると、私が審判委員長を引き継いだときは、国体関東ブロック大会、スポレク関東大会など大きな大会がありました。しかし、当時はまだ審判委員会と組織だっていえるものではなく、山梨大学の学生や、私の所属していた県庁テニスクラブから審判が出来るような人をお願いしてこなしている状況でした。

関東テニス協会の委員会などに出席をしても、他の県の活動の広さに驚かされるばかりでした。本県においては、当時は全ての試合をセルフジャッジで行っていましたが、SCUなどの審判の需要もありませんでした。

その後、今では県内の大きな国際大会として定着した甲府国際テニスが平成15年頃始まりました。丁度その少し前に、現在、副委員長である遠山さんが、選手としてではなく、審判の方に興味も持たれて資格を取得するなど積極的に活動していただきました。

遠山さんはライセンスC級を取得したあと、続けてB級も取得しました。そして、審判に興味を持たれている方を見つけては資格を取得させ、審判活動をしてもらうなど、今の礎を築いてくださいました。その結果、関東小学生、国体関東ブロック大会、関東ろう者、関東実業団テニスリーグ等、学生に頼らなくても審判をこなすことができるようになりました。また、平成20年頃より県主催の大会でSCUを始めることができました。近年は、ルールに対する対応が厳しく、資格をもった審判でないと個々の対応が難しくなっています。

現在は若手の矢崎さんもB級の資格を取得し、県外の大きな大会などでも審判活動を行う人材が現れるようになり、今後の協会内の審判活動も将来が期待できるようになりました。

今後は、多くの方がプレーヤーとしてだけでなく、審判という別の側面からもテニスを楽しむことができるようになっていただきたいと思います。

○審判委員会活動の歴史

昭和 6 1 年	かいじ国体開催に参加、主審副審の二人体制で行う。
平成 4 年	全国ねんりんに SCU として参加。
平成 8 年	全国インターハイに RU として参加。
平成 1 1 年	C 級審判認定講習会（C 級 4 1 名合格、既 C 級 9 名、B 級 3 名）。
平成 1 2 年	関東ろう者大会（テニス競技）が開催。SCU として協力する。
平成 1 2 年	国体関東ブロック大会が山梨県で開催され社会人、学生あわせて 32 人が SCU として参加する。
平成 1 3 年	この年から始まった関東小学生テニス大会に RU として参加する。
平成 1 4 年	C 級審判認定講習会。
平成 1 9 年	C 級審判認定講習会（C 級 3 0 名、B 級 8 名、B 級レ 2 名）。
平成 2 0 年	国体関東ブロック大会が山梨県で開催され社会人、学生あわせて 18 人が SCU として参加をする。
平成 2 0 年	関東ろうあ者体育大会（テニス競技）が開催。RU として協力をする。
平成 2 0 年	県大会において A 級決勝に SCU を配置する。
平成 2 1 年	山梨県審判委員会再編（C 級 5 2 名、B 級 8 名、B 級レフェリー 2 名）。
平成 2 4 年	関東オープンベテランに RU として参加。
平成 2 6 年	関東実業団対抗テニスリーグ選に RU として参加。
平成 2 7 年	関東オープンベテランに RU として参加（一部 SCU）。

○平成27年5月現在の審判員名簿 (敬称略)

No	種別	名前
1	レフェリー	小中 恵美
2	レフェリー	遠山 美砂
3	レフェリー	竹中 理恵子
1	チーフアンパイア	遠山 美砂
1	B 級審判員	長谷川 康
2	B 級審判員	遠山 美砂
3	B 級審判員	竹中 理恵子
4	B 級審判員	小中 恵美
5	B 級審判員	深沢 尉子
6	B 級審判員	一瀬 真理子
7	B 級審判員	矢崎 仁
1	C 級審判員	小林 繁
2	C 級審判員	水上 浩之
3	C 級審判員	渡辺 旭
4	C 級審判員	牛山 邦彦
5	C 級審判員	長岡 いづみ
6	C 級審判員	鎌田 健義
7	C 級審判員	青沼 功
8	C 級審判員	斉藤 隆
9	C 級審判員	宮崎 佐智子
10	C 級審判員	諸角 幸子
11	C 級審判員	望月 美紀子
12	C 級審判員	大森 みほ
13	C 級審判員	大西 恵美子
14	C 級審判員	竹島 美由紀
15	C 級審判員	石山 清美
16	C 級審判員	竹川 由佳

渉外・普及委員会

委員長 小野 嘉一郎

私が、硬式テニスと出会ったのは高校に入学してからでした。その頃、硬式テニスをしている学校も少なく、指導してくれる顧問の先生もテニスの経験もなく独学で勉強して我々に教えてくれましたが、テニス人口も少なく他県とのレベルの差を感じました。

高校を卒業してから、山梨県テニス協会とのかかわりが始まり、40年余りの歳月が過ぎ50周年記念に携わることが出来ることに、深く感謝いたします。

渉外・普及委員会の活動は、新聞社への後援依頼及び申請・市町村教育委員会からのテニススクールの講師派遣・スポーツ指導員の養成・テニスの日、カモン！キッズテニス、マナーキッズテニス、TENNIS PLAY&STAYの実施があります。

テニススクールでは、小学生から社会人・高齢者等色々な方々がテニスを楽しみますので、楽しさ・面白さ等を伝えケガの無いようプレーしていただくよう心掛けています。

テニススクールを開催するに当たり、テニスを“安全で正しく楽しく、実践する人材としてスポーツ指導員の育成にも力を注いできましたが、近年、金銭面・時間等の問題で受講していただく方が多くありません。職場・学校・スクール等で指導している方々には、受講していただくようお願いしていきたいと思います。

TENNIS PLAY&STAYは、始めよう・楽しもう・続けようを基本に遅いボール、短いラケット、小さいコートを使用し小さな子供から高齢者の方までテニスを楽しむスポーツで、昨年、南アルプス市テニス協会と甲斐市テニス協会で開催していただきました。今年度も、開催を予定しています。

今後も、子供の頃から、テニスに興味を抱き将来世界のトップで活躍する選手になれるよう、また、健康でいつまでもテニスが出来よう普及に努めていきたいと思っています。

ジュニア委員会

委員長 富岡好平

記録を遡ると1980年に山梨県テニス協会ジュニア委員会が発足し、活動が始まっています。当初は一部のクラブが中心になって活動していましたが、当時のテニスブームの影響でクラブが増え、その中でジュニア育成を行う所が自然に増えていきました。

しかし、他の都県が次第に大きな勢力となる中で、山梨県はかなり遅れを取っていた時期でもありました。そのような中、関東テニス協会からの要請もあり、しっかりとした組織を作る必要に迫られた事を記憶しています。同時に関東テニス協会ジュニア委員会活動で重要な施策でもあった、ジュニア個人登録制度も他の都県が登録者数を伸ばしている中、山梨は僅か3名の登録者しかいなかった事も記憶に残っています。

当時、まずは個人登録者を増やす事が課題でした。そこで、山梨県ジュニアテニス選手権への参加者に対して補助を行った結果、時間はかかりましたがある程度になっていきました。今日では登録者はまた減少傾向にありますが、競技力向上を考えると公認大会含めて競技に参加していく選手の育成の必要性を感じています。

また、この10年位で取り組んだ施策としては、トーナメント環境の充実でした。山梨県内にはテニスコートは結構沢山あります。まずここを利用して地元のジュニア達に競技に参加してもらう、登録のいない初心者大会の開催でした。これまで殆ど選手がいなかった地域、山中湖村、富士吉田市、甲州市、北杜市などでの開催は、ここ数年大勢の参加者を数えるようになってきました。一極集中に成らない様全県的な広がりを作ろうと考えてきました。さらに、県外からの選手を呼び込み、県内選手と対戦させる事は競技力向上につながります。また、関東全国を意識させる必要があります。

これまで各方面のご協力もあり、年間公認ジュニア大会8大会を開催するとともに、また14歳以下のアジアテニス連盟公認須玉国際ジュニア、ITF 山梨国際ジュニアの開催も含めると年間10大会、さらにITF 甲府国際オープン男女\$10000の開催など、全国的に見ても日本一のテニス環境が整ってきております。

この様な中、2014年には関東ジュニアダブルスで優勝者が出ました。またシングルスでもベスト4に入るなど多少成果が出てきた年でもありました。

しかし、山梨の置かれている現状はやはり厳しいものがあります。人口減少また登録者数の頭打ちなどジュニア選手の確保と選手育成は、高校・中学など各方面と協調してやっていく必要があります。小さい県だから出来る小回りの利く利点と、テニス環境日本一の利点を生かし、山梨を日本一の先進県に出来たらと思っています。

さらに、近年ランキングだけに目がいく事が多いのですが、社会的なマナーの向上、対戦相手・大会関係者などへのリスペクトなど必要な時代となっていると思っています。

実業団委員会

委員長 鎌田 健義

平成27年度に山梨県テニス協会が50周年を迎えることは、実業団委員会として、まことに喜ばしく存じあげるとともに、半世紀もの間りっぱに本協会を運営されてきた諸先輩方をはじめとして、土屋会長や現役員の皆様の御尽力に心から敬意を表します。

私が実業団委員会の委員長を前委員長の小塩さんから継承したのは、平成16年度でバブル景気が崩壊し、世の中が大変不景気で「失われた20年」と言われた時期でした。各企業も非常に経営が厳しく、とてもテニスどころではなかったと思います。実際に平成2年度から開催された山梨県実業団リーグ戦を撤退するチームが何チームもあり、「会社の事情で」と言われるたびに私自身も非常に辛い思いをした記憶があります。そのような時期を関係者の努力で乗り越えて、今の実業団テニスがあるということを思うと、感無量であります。

さて、実業団委員会は、山梨県の会社、銀行、官庁、商店等実業団テニスの充実を図り、関東大会へ代表チームを出場させる目的で昭和63年度に発足して活動してきました。実業団委員会発足時、私は副委員長を務めさせていただきました。

関東大会についてですが、大会は2種類あり一つはプロフェッショナルの選手が出場でき、日本リーグに通じる関東実業団対抗テニスリーグ戦（関東リーグ）で、もう一つは、過去7年間に全日本選手権に出場した選手は参加できない等選手資格に制限のある関東実業団対抗テニストーナメント（Bパル関東大会）です。年度別各関東大会県代表チームについては、別資料で紹介していますので参照してください。

両関東大会には、それぞれ全国大会があり、Bパル関東大会では、平成3年度に男子：山梨県庁（全国大会第4位）、平成4年に男子：東京エレクトロン、平成5年に男子：山梨県庁、平成10年に女子：山梨県庁、平成20年に男子：東京エレクトロンがそれぞれ全国大会への出場権を獲得しています。関東リーグでは、平成17年度と平成18年度に女子：山梨県庁が全国大会への出場権を獲得しています（いずれも出場は辞退）。残念ながら男子は未だ全国大会への出場権を獲得したチームはありませんが、昨年（平成26年度）の関東リーグ山梨大会において、山梨県庁が全国大会決定トーナメント戦出場にあと一勝というところまでできております。山梨県の実業団テニスの実力は着実にアップしていると強く感じました。

実業団委員会は、今後も実業団テニスを通じて社会人テニスの振興に少しでも寄与できるよう活動してまいりますので、テニス関係者の皆様方の相変わらずのご支援についてよろしくお願いいたします。

前委員長 小 塩 幸 弘

実業団委員会を発足するきっかけになりましたのは、昭和62年度第2回関東実業団対抗テニスリーグ戦を山梨県大会として山中湖庭球倶楽部で行う事を、関東テニス協会実業団委員会から要請があった事でした。

当時の山梨県テニス協会は、かいじ国体・全国スポレク大会などの全国規模の大会を立て続けに運営してきており、大きな大会は控えたいという状況でしたのでその大会の開催を受け入れる事には困難がありました。

しかしながら、実業団委員会を山梨県庁テニスクラブメンバーを中心に協力を頂くなか、正式に発足させ山梨大会の開催ができ無事に大会を終える事が出来ました。

その後、地域実業団リーグ戦の充実を図る日本テニス協会の意向もあり、本格的に山梨県実業団リーグ戦を平成2年度から開催することができ、以前からの関東実業団テニストーナメント山梨県予選大会・社会人ミックスダブルス大会を含めた運営が実業団委員会の中心的な活動となりました。

特に実業団リーグ戦では、会社の福利厚生の一環としてテニスクラブ活動が多くあるなか、団体戦として仲間同士で山梨県テニス協会の公式の試合を小瀬スポーツ公園テニス場で行えるというメリットが、今まで対外試合に縁がなかったメンバーにも刺激を与え参加を促すことができた結果、一時は男女合わせて90チームを超えるリーグ戦とすることができました。

しかしながら、実業団という性質上世の中の景気と会社の方針に大きく影響を受けて、参加チーム数などが大きく左右され大会運営に厳しい時期もありました。そんな中、仕事の都合上実業団委員会を離れる事になりましたが、その後もこの活動をしっかり引き継いで頂き、現在の実業団委員会を築いて頂いております鎌田委員長をはじめとする委員会役員及び、山梨県テニス協会役員及び関係者の方々に感謝申し上げます。